

2006年 12月15日発行 (隔月刊)

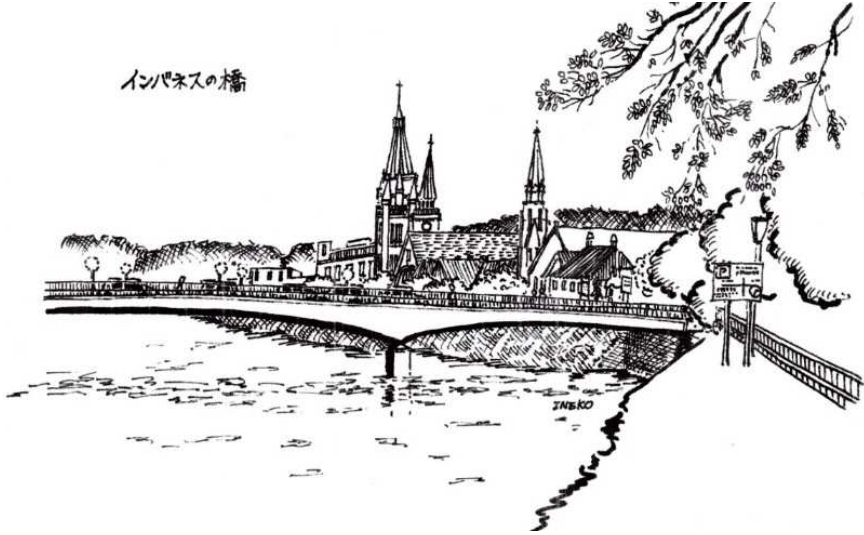


う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2006年12月
第 59 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

インバネスの橋



目 次

Normal、Normalize、Normalization (4) (岡田健嗣)	1
点字から識字までの距離 (55)	
みどり学級へのサービス (4) (山内 薫)	5
酔夢亭読書日記 (18) (酔夢亭)	9
見果てぬ夢を (2) (山本優子)	11
白川静先生逝く (岡田健嗣)	15
ひとつこと (岡田健嗣)	16
漢点字訳書紹介「珠玉百歌仙」	19
漢文のページ	21
ご報告とご案内	23
編集後記 (木下和久)	24



Normal Normalize Normalization (4)

岡田 健嗣

二 (承前)

「実は先生のお話は朗読ボランティアの方からよくうかがっていました。」

私は漢点字についてはほとんど知りません。知らない私がこんなことを言うのも変なのですが、点字の漢字は先天全盲の方の教育には必要不可欠だと思えます。やはり漢字一文字一文字に本来的にどんな意味が込められているか、どんな概念を表している文字なのか、音読み、訓読みは：

私は先天全盲の方でもそうしたことを学んでいただけたらと強く思います。

私は大学院に在籍している時にたくさんの地方の盲学校の音楽の授業を見せていただき、先天全盲の方と関わらせていただきました。その時に感じたことは、その人たちの多くが言葉を構成する単語一つ一つ、こ

れはテレビやラジオから耳に入ってきている言葉かと思われるのですが、それら単語に彼ら独自の意味づけが為されて使われているのです。

ですから一般の人には何を言っているのか、何を言おうとしているのか理解しづらいケースが多々あります。その時、視覚障害者の国語教育の大切さを痛感しました。もしかすると先天全盲の方々への漢点字教育がシステムチックに行われる環境が整ったら、単語ひとつひとつへの正確な概念付けが実現するのではないかとふと感じました。」

（以上は、盲学校で教鞭を執っておられる私の知人が受け取ったメールの一部である。発信された方のご許可をいただいて、ここに転載させていただきました。）

これまで、「識字」と我が国に暮らす視覚障害者の文字の現状、そしてルイ・ブライユの点字の最初期の普及状況と、漢点字の普及の現状との酷似について述べて来た。

ここに掲載させていただいた通信文は、漢点字の普及に尽力されているある盲学校の先生宛に、視覚障害者の文字の現状をあまりご存じないまま盲学校の教育現場をご覧になった方の、極めて率直にご感想を述べられたものである。私も当事者として同様に感じ続け

て来た。そこで転載のご承諾をお願いしたものである。

この方は、大変よいところをご覧になっている。

言葉は極めて論理的な構造をなしていて、その仕組みに則って使用されなければ用をなさない。言語学者のチョムスキーによれば、その構造は世界の言語に共通していると言う。それは、「S（主語）＋V（述語）」の存在である。「私は（S）食べる（V）」、「あなたは（S）女性だ（V）」、「彼は（S）行った（V）」というように、日本語ではaはbする、aはbだ、aがbした、すなわちaがS（主語）・bがV（述語）という関係とそのバリエーションの構造である。それが世界の全ての言語の基本構造だというのである。

もう一つ、人の言葉はその意味の面から見ると、多層性に満ちている。

私たちの身近には、人とは違った生き物がいる。そして少なからずかれらとのコミュニケーションに成功したという経験を持つている。私も飼っていた猫に何かを言って、猫がそれに応えてくれたり、猫が私に何かを問うて、私がそれに応えるという経験があった。まるで人との対話と言ってもよいほどに、濃密な意思

疎通が実現したと感じたこともあった。相手が犬ならなおさらだろうし、馬術家なら馬とのコミュニケーションは一つの方法になっているはずだ。

中沢新一氏によると、このようなコミュニケーションと人の言葉によるそれとは、基本的なところで質を異にしている。人の言葉は、その意味するところは多層性に富んでいて、多くの語彙に派生し、多くの語彙から派生する。従って一つの言葉が、使用する人や使用される状況によって、多義に用いられるのである。

つまり人の言葉は人の言葉であることによつて、〈喩〉的なのだ。（中沢新一著『芸術人類学』 みすず書房 二〇〇六年）

たとえば身体の部分の名称をとつてみると、

・目（め）…「目（視覚器官）」「眼球」、「目つき」
「眼差し」、「網の目」「碁盤の目」「潮の目」「台風の目」「針の目」「魚の目」「結び目」「鋸の目」「賽の目」「目方」「量目」「折り目」「境目」「変わり目」

・鼻（はな）…「鼻（呼吸器）」、「鼻梁」、「端（突き出たところ）」「はなから調子がいい」「聞いたはなから忘れる」「寝入りばな」「出ばなをくじく」

・耳(みみ) …「耳(聴覚器官)」、「外耳」「中耳」「内耳」、「耳が早い」「地獄耳」「耳が痛い」「耳学問」「耳(耳の形の取つて)」「耳(織物や食パンの端の厚みのある部分)」「耳(書物の背の丸くなったところ)」

・手(て) …「両肩から左右に垂れる運動器官」、「手(うで)」「手(手のひら)」「手(手の指)」、「手(突き出たもの、取つて、柄)」「手(蔓を巻かせる棒)」、「働き手」「人手」「手下」「踊り手」「語り手」、「手にする」「火の手」「手札」「手の内」「いい手が来る」「手に余る」「手を切る」「四十八手」「手習い」「手料理」「捜査の手」「魔の手」

挙げれば限りなく出て来る。「王手飛車取り」「その手は桑名の焼き蛤」「その目はないよ!」「いやいや鼻先ににんじんぶら下げてるのさ!」、ご座興にもなる。人の言葉は、いくらでもその意味の厚みを増す傾向があるようだ。

私は現在、漢点字の公衆用のテキストを、その非力にも関わらず、そろそろと書いている。そこで苦労するのが、先ずはその文字の形と意味である。次に苦労するのが、文字の意味の広がりである。最後に苦労す

るのが、漢点字の構成と漢字の構成の対比である。一つの例を挙げれば、

・束^{●●●}^{●●●} ソク たば たば、ねる つか、ねる …「木」と「口」を重ねた形の文字。細い木を一掴み束にして紐で縛った形を象つたもの。〃たば、たばねる〃とは、棒状の細いものや、紙や海苔など薄くて平たいものを、一定の量を紐などで縛ること、そのようなもの。〃つかねる〃とは、一掴みの棒を束にすること、〃つか〃とは、掴んだ手の四本の指の幅、ほんの少しの幅の意味。〃ソク〃の音では、「束縛」とは、自由にさせないこと、「時間に束縛される、職場の人間関係に束縛される」。「約束」とは、何かの取り決めをしてそれを守らせること、「約束事、約束手形、口約束」。漢点字では、「^{●●●}」とその右側に「^{●●●}」で表される。といったことを記す。加えて「束の間」とか、「人を束ねる」とかも例に挙げるだろうし、もつと言えば、二十世紀を彩つた政治の有り様の一つ、現在もなお世界はそのトラウマから癒えていない「ファシズム」の原義を表現する文字であることまで書くかもしれない。

国語学の大野晋氏によれば、氏と同年代の大学生の

語彙数は三万語に達していたが、現在（一九九〇年代）では、恐らく一万五千語に満たないのではないかと書いておられた。（大野晋著『日本語練習帳』

岩波新書 五九六）

また私たちがお世話になっている横浜国立大学教育人間科学部の村田忠禧先生によると、毛沢東の著書に用いられている文字は、せいぜい三千字程度とのこと、むしろそこから派生する語彙の豊かさが他を圧倒しているのだという。

中沢氏は、このような人間の言葉が新人（ホモサピエンス・サピエンス）を、他の動物やそれまでの人類（ネアンデルタール人）から決定的に別れさせた。氏はこのような性向を（対称性）と呼ぶ。この（対称性）は芸術や宗教に結実したという。また自然に根ざした動物である人は、もう一つの性向も保持している、氏はこれを（非対称性）と呼ぶ。人の社会ではこれが、効率の追求、経済の拡大、権力の強化へと向かわせる。現代はこの（非対称性）が優位となった時代、（対称性）を見失った時代と捉えて、その回復が求められているというのである。

本拙文の冒頭にご紹介した文は、具体的な方法には至らないが、現状の把握には、充分成功していると考

える。言葉は、手解きする人（教師）がいて、それを享受してやっとスタートラインに立つことができるのである。言葉の要素として大きな位置を占める（文字）も、このような視点から検討される必要がある。

幾度も繰り返し返すことになるが、我が国の視覚障害者の言語教育は、まだ緒にも立ってはいない。言わばルイ・ブライユ以前である。ブライユは極めて単純明快な構成の（点字）を、視覚障害者の触読文字として提案した。世界はそれを可として受け入れ、現在では触読文字といえはこのブライユに由来する（点字）を指す。我が国の（点字）も、このブライユの点字の構成を基に翻案された。しかしカナ文字だけが公認されて、現在に至っている。日本語が表記される文字で、最も大きな要素である（漢字）は、触読文字として唯一、川上泰一先生が考案した（漢点字）が提案されているが、残念ながら公認には未だ至らない。

これを以て私は、日本語の点字はまだ「ブライユ以前」と呼ぶのである。

そこで漢点字の普及を考えるなら、文字を教える立場の人びと、つまり学校の先生方に、まずは（漢点字）をマスターしていただかなければ叶わないことに気づく。しかも現在最もそれを拒んでいるのが、他な

らぬその先生方である。理由は二つある。

①盲学校の視覚障害の先生方は、〈漢点字〉をマスターしなくとも、今は職を追われる心配はない。言い換えれば、〈漢点字〉をマスターするときの抛り所は、正に「こころざし」だけなのである。現在では全ての先生方に、「こころざし」を持ってもらわなければならないが、…。

②驚くべきことだが、視覚障害者（児）に関わる晴眼の先生方の多くは、〈点字〉そのものをご存じない。触読はおろか、眼でも読めない。点字を学んで、視覚障害の子どもたちに教えようという意欲が薄いと云う。パソコンで文字が打てればよいと言われる方も現れる。触読そのものに目をつむり、口を拭って、何も言われないのである。勢い視覚障害の子どもたちから、点字を奪う結果になっている。ブライユの〈点字〉の普及を妨げた人びとは、このような人たちだったのだらうか。現在では私たちの勧める〈漢点字〉を「代替文字」と呼んで、漢点字は漢字ではないとさえ公言される方もおられる。そんな方も、触読には口を噤んで何も言われないのである。

このような状況を如何に克服するか、私たちは、まだまだ試行錯誤しなければならぬ。

点字から識字までの距離(五五)

みどり学級へのサービス(四)

↳ 緑学級での催し物(二) ↳

巻紙芝居「おおきなおおきなおいも」

山内 薫（墨田区立緑図書館）

みどり学級で行った手製の出し物の中で最も古く、様々な場所でも多く上演し、あるいは貸し出して各地で上演された出し物は巻紙芝居（まきがみしばい）の『おおきなおおきなおいも』である。“巻紙芝居”という名がこの作品にいつの間にか付いた名称で、多分一九七〇年代の中頃に仙台の図書館で話をさせて頂いた時に命名されたのではないかと思う。今回はみどり学級と直接係わるわけではないが、この「巻紙芝居」について記してみたい。

一九七二年の一〇月に福音館書店から『おおきなおいも』(市村久子作、赤羽末吉絵)という絵本が発行された。この絵本には「鶴巻幼稚園・市村久子の教育実践による」という副題が付いていて、幼稚園教師である著者が実際に幼稚園で行った実践が元

なつて作られた絵本である。ストーリーは、みんなが楽しみにしている芋掘り遠足が雨のために一週間延期になってしまふことから始まる。子どもたちは一週間でお芋がどれほど大きくなつてゐるかを想像して、紙を次々と繋いで絵の具でお芋を描いていく。書き上がったお芋の絵は、何ページにもわたり、絵本のページを何回めくつてもお芋の絵が続く。そんな大きな大きなお芋をどうやって掘り出して幼稚園に運ぶか、子供たちの想像力はどんどん膨らんで行く。幼稚園に運ばれた大きな大きなお芋はプールに浮かべて芋丸という船になつたり、イモザウルスという恐竜に見立てられたりしたあと、焼き芋や天ぷら、大学芋になつて子供たちのお腹に入る。お腹がばんばんになつた子供たちは、イモラスというロケットになり、「ぶー、ぶわーん」とおならで宇宙に飛び出す荒唐無稽な楽しい物語になつてゐる。当時、私は図書館に勤めてまだ三年目だったが、その前年から子どもへのサービスの担当になり、その年の一二月のクリスマス会の出し物を考えていた。そんな折にこの絵本が刊行され大変面白い絵本なので、是非クリスマス会で紹介したいと思つた。この絵本の最大の山場は何回ページをめくつてもお芋の絵が続くところにある。これを本当に大きくて長い



巻紙芝居の始まり

一時に完成したのだった。この「巻紙芝居」は二人で演じることになり、読み手は筒状に撒かれた障子紙を引き出しながら話を展開していきます、もう一人は終わった場面を巻き取っていく。三メートル

お芋にできないかと考えた。そこでロールになった障子紙を買つてきて早速製作に取りかかった。この絵本は墨とピンクの二色しか色が使われていないので、黒のマジックで絵を真似、その上に淡いピンクの絵の具で色を付けていく。最大の山場であるお芋の場面は横幅がほぼ三メートルにわたる長い大きなお芋を描いた。実を言えばゆつくり準備をして作つたわけではなく、翌日がクリスマス会当日という前日に切羽詰まつて製作に取りかかり、およそ五時間を費やして夜中の



長靴はいていけばいいんだ



もっと紙もっと紙



おおきなおいも

近くに及ぶ大きなお芋の場面が終わって次に移る時には、巻き手は猛スピードで障子紙を巻いて行かなくてはならないので大変だ。しかし、少しずつ少しずつお芋を引き出して行って、どんどんお芋が大きくなる場面です。子供たちの顔を見るのは何よりの楽しみだ。時に母親なども含めて多くの観客が目を見開いてワァーという声を発してくれる。

およそ二〇メートルの障子紙を一本半使ったこの紙

芝居は、この三五年余りの間に本当に多くの場所で上演し、またされてきた。足立区の図書館に貸し出した後には、巻き取るための太い棒が付いて帰ってきた。それ以降は棒で巻き取ることができるようになり、とても上演しやすくなった。またあるところでは特製の箱に入れて返して下さった。おそらく何百回と使われたにもかかわらず、未だに使えるのは障子紙の強さによるのだが、既に何カ所かは一度ちぎれた部分を別の



おいもパーティー



おしまい



清風園で上演

障子紙で裏打ちしてある。

この巻紙芝居は結構評判となり、製作してから四年程後に雑誌『an' an (アンアン)』（マガジンハウス社）の取材を受けたり、読売新聞の江東版の一九七六年九月一日には六段組の記事「モテモテ“ワイド紙芝居”巻紙に絵、長さ五十メートル」が載った。（五〇メートルというのは記事を書いた記者の誇張で全長はおよそ三〇メートル）『an' an (アンア

ン)』の半ページの記事と読売新聞の記事には図書館前の芝生で子どもたちに巻紙芝居を上演している写真も載った。そこで、著作権の問題があるので、画家である赤羽末吉氏に電話をし、こういうものを作り、雑誌で紹介されることになったが許可を頂けないかと依頼した。電話ではあったが赤羽氏は即座に了解して下さった。読売新聞江東版の記事では「原作者の赤羽末吉さん（六六）（鎌倉市在住）に了解を求めたとこ

ろ、『子供たちが喜んでくれるなら自由に作って結構』と快諾してくれた。巻紙の紙芝居は、大事にフロシキに包まれ、今では同館の貴重品扱い。一日二、三百人は来館する子供たちの間では、“おいもの紙芝居”として有名。」と書かれている。(その後、赤羽末吉氏は一九九〇年に亡くなった) 当時は著作権について、今程やかましくない時代であり、図書館では絵本の大形化や劇化などを自由に行っていた。人気のある絵本などを年に二回行う人形劇やクリスマス会の折に、様々に工夫して行ってきたが、未だに一番人気があり、しかもインパクトがあるのはこの巻紙芝居の「おおきなおおきなおいも」である。(写真は二〇〇四年一月一七日のみどり学級での上演と特別養護老人ホーム清風園での二〇〇二年の上演の様子。今年も一回みどり学級で上演した)



酔夢亭読書日記(第18回)

酔夢亭

某月某日。

芝生の上にあぐらをかいて、弁当をのんびり食べて

いる昼下がりの公園。鳩の群れが噴水のあたりに一団となつて、みんなで地面の何かをつついてい

る。サーと一羽のカラスが滑空してくるや、鳩の群れを襲い、哀れ、えじきになるものがあった。そんな光景を間近に見て、うむむ、と唸った午後であった。

通常はいくら平和の使いといわれ、弱ちちくて食いしん坊で糞ばかりあたりには散らかし、公衆の面前で平気に交尾している鳩であっても、そう簡単にカラスに食われることはないはずである。

思うに、その鳩は余程弱っていたのではないだろうか。野生の世界では、弱っている個体は他の強い動物の餌になるのはいたしかたない。鷲の雛なども自分が生き延びるために、同じ親から生まれた兄弟を殺してしまうという。

万物の生物に勝るといわれる人間界には、こういうことは起らないはずだが、近ごろの世相をみていると、人間も動物もたいして変わらないように思えてしまう。

某月某日。

「アガサ・クリステイヤー自伝」の中に、二匹のカエルの話があるという。

二匹のカエルが牛乳壺の中に落ちました。どうして

も脱出できません。二匹ともおぼれないように泳ぎ続けていましたが、やがて一匹の方は「コリヤもう駄目だ」とあきらめ、もう一匹は懸命に泳ぎ続けました。

翌朝、あきらめたカエルは溺死し、泳ぎ続けたカエルは壺の中に浮かぶバターの小島の上にちよこんと乗っかっていました（『創造力をみがくヒント』伊藤進。講談社）。

世界の枠組みは、おうおうにして自分で勝手につくって、その勝手につくったフレームに囚われてしまう。自縄自縛に陥る。枠組み自体を疑ってみるということは心理的にも、難しいことである。

某月某日。

また、クリスマスの季節がやってきた。バーやキャバレーで大騒ぎする日、これはおじさんの発想。

サンタクロースがプレゼントを持ってきてくれる日、これは子供の夢である。かれしかのじよと一緒にロマンチックに過ごす日、これは年頃の男女の願望だ。

ところで、クリスマスって一体何の日なんだろう？

その昔。

貧しいけれど、愛情たっぷりの若い夫婦がいた。二人の財産といえば、代々伝わる夫の金時計と腰まで伸びた妻のつややかな髪だけだった。二人は相手が喜ぶプレゼントをクリスマスの日に何としても贈りたかった。相手を喜ばせたかった。でも、お金がなかった。二人は金銭的にはすごく貧しかったのだ。

妻は美しい髪を売った。

夫は大切な金時計を売った。

そして、プレゼントを買ったのだが：

オー・ヘンリーの「賢者の贈り物」というお話である。

二人はあのととき若かった。あれから、30年。中年になった夫はときどき思うのだ。「妻の髪の毛はあれからしばらくしたら、元通りの長さになった。私の金時計はもう戻ってこない」（愚者の贈り物 ジェフリー・スコット・ベイカー）。

クリスマスの日に、なぜ、プレゼントを贈らなければならぬのか。

郵便局に1500円払って申し込むと、サンタさんから手紙が届く。もうちよっと払うとプレゼントが贈られてくる。そこまでしてなんなのよ、とちよっと不機嫌になってくる。

見はてぬ夢を(二)

山本優子



本誌前号から分載を始めました『見果てぬ夢を』につきまして、前号では開始に当たってのご紹介文を落としてしました。読者ならびに関係者各位に、深くお詫び申し上げます。

「左は、兵庫県立盲学校・創立百周年を記念して、同校の教諭・古賀副武先生（現在は退職）が、創立者・左近允孝之進の足跡を辿り、その調査資料を基に、童話作家・山本優子氏に小説化を依頼して成った作品です。古賀先生のご許可をいただいて、本誌今号から分載致します。」

なお活字書は、株式会社山葉出版から、二〇〇五年六月二十日に発行されています。」（岡）

二 十有五にして学に

「我、十有五にして学に志す……」

セミの鳴く声に負けじと、孝之進は声を大きくして暗誦していた。ここは、竜尾（たつお）小学校だ。明治九年に始まったばかりの学校である。薩摩は古くか

ら教育熱心な土地柄だった。寺子屋や藩校にあたる郷土教育の学び舎である郷中（ごじゅう）という学校が、関が原の戦いのころから続いていた。父尚一も郷中で学んだ。西南の役の前後に郷中は廃止されたが、その流れをくむ学舎（がくしゃ）という教育機関が設けられ、引き続き地域の子供たちを集めて教育にあたった。それと並行して明治十年前後には小学校が創設され始めた。士族の親たちの多くは、子供を小学校に行かせることを選ぶようになった。孝之進も開校したばかりの四年制の小学校に入った。小学校は伝統的な郷中の流れを引き継いだものだった。地域の先輩たちが、漢文の素読を中心に教えたばかりでなく、剣道や相撲といった武術による心身の鍛錬、各種伝統行事の継承、日常の礼儀作法から規律までの団体行動を身につけられるような指導もあった。イギリスのボーイスカウトはそのような薩摩の郷中教育を参考に作られた組織だと言われている。父が西郷さんに反旗を翻したとは言え、郷土の人々は孝之進に優しくかった。

入学以来、孝之進は、乾いた砂が水を吸い込むように、教えられることを吸収していった。学んでいる時、孝之進は心ひきしまる思いに浸っている。父を喪った後、兄弟がいらない自分に対する周囲の期待を感じていた。何よりも母千代を支えられる立派な人間にな

りたいと子供心に思うようになった。そのためには学問をする必要があると信じた。学ぶのは楽しくてならなかった。

母は父の死後、焼酎の販売店で働き始めた。早朝から夜遅くまで仕事をし、時々七厘の火を起こしながら居眠りをするこゝさえある母だ。孝之進は母を樂にしてやりたいと思わずにいられた。なかった。

学校では従兄弟の森山文吉（もりやま ぶんきち）といっしょに勉強していた。文吉は母の兄にあたる森山平吉（もりやま へいきち）の息子である。平吉も「西南の役」では官軍に入っていた。父尚一と違うのは、平吉は生きて戻ってきたことだ。それだけに平吉は、母と二人遺された孝之進に特別よくしてくれた。

ことあるごとに平吉は、孝之進に言った。

「コウ、俺（お）いをお前いが親父（おやつ）どのの代わいち思えよ。お前や一人（ひと）い〜じやなか。俺いが付いちよつでね。もし、お前（ま）ゆ除けもんにすいよな奴がおつたなあ、俺い言えよ。（コウ、おれをおまえの親父がわりと思え。お前はひとりではないぞ。おれがついていからな。もし、おまえをのけものにするような奴がいたら、おれに言えよ）」

また、焼酎が入って饒舌になると、決まって言っ

た。

「よかか、人として生（ん）まれたからな、夢や幻ゆ持たないかん。今は日本の国が生まれ変わるちちよい大変な時代じゃ。自分の命（いの）つ賭けてでん、周（まわ）いのものにさげすまれてん、立派な国を作いちいう太（ふと）か夢んためな、進まんならんとよ。（良いか。人として生まれたからには、夢を持たねばならない。今は日本が生まれ変わるうとしている大変な時代だ。自分の命を賭してでも、周りの者にさげすまれても、りっぱな国を作るといふ大きな夢のためには、進まなきやならんのだ）」

孝之進は、すっかりとうなずくのだった。

「我が命つ捨ててでん、お国んためい働つ。（自分の命を捨てても、お国のために働く）」

決心すると、身体中から勇気がみなぎってくるようになった。母のためということはもちろんだが、お国のためにもしつかりと学問をするのだ、と孝之進は自分に言い聞かせた。学校に出させてもらう時間以外は、焼酎造りの手伝いをして働いた。

一八八〇年（明治十三年）に小学校を終えると、孝

之進は焼酎造りの手伝いの仕事を続ける傍ら共立学舎に籍を置き、自学自習で中学進学を目指した。この共立学舎の創立者は、野村政明（のむら まさあき）という人物だった。野村は鹿児島中学の創設者でもあり、鹿児島新聞の初代社長を務めたことで知られている。

一八八一年（明治十四年）になると、西南戦争で投獄された私学校（西郷隆盛が創設）の中堅幹部が次々に釈放されたわけだが、その中の一人が野村だった。野村たちは、獄中で練っていた郷土の復興事業にとりかかった。一つは私学校に代わる教育施設である鹿児島中学の創設、もう一つは自由民権を啓蒙するための新聞創刊だった。共立学舎や中学の経費は野村による浄財で賄われており、生徒から費用の徴収は一切なかった。鹿児島士の家計は苦しかったため、野村は身銭を切って無償の教育を提供したのだった。

少年孝之進は、野村の姿を見、演説を聴いた。こういう人を立派な人というのだろうと、感動した。そして、始められたばかりの鹿児島中学に一八八一年（明治十四年）に入学した。

一八八二年（明治一五年）二月には「鹿児島新聞」（「南日本新聞」の前身）が創刊された。十二歳にな

っていた孝之進は人が読んだ後の新聞をもらい、一心に読みふけた。国会開設や言論・集会の自由を訴えるの討論などを知らせる論説は、特に何度も読み返さずにいられなかった。読んでいると、内から熱いものがこみ上げてくる。新聞社は孝之進の家からは歩いて十五分くらいで行ける旧戸長役場（きゆう こちよう やくば）にできていた。孝之進は、わずかな休憩時間に、新聞社を見に走った。

鹿児島での新聞印刷は初めてだっただけに、新聞社には見物人が押しかけていた。当時の印刷機は三人がかりで動かす人力機だった。活字をはめこんだ版の上にインクを塗り、紙を載せ、ギョツと押しつけては取り出すという単純作業が繰り返される。職人たちの息のあった流れ作業に、見ている大人たちは「速いものだ」と感心しあっていた。刷りたての新聞が掲示板に張り出されると、たちまち人々が群がった。

孝之進は、文選、植字、組版、印刷の工程を飽きずに眺めていた。大人たちが食い入るように新聞の活字を読む様子を見るだけで、心が弾んでくる。残念ながら、戸長役場内の鹿児島新聞社・印刷所は半年あまりで引き揚げてしまった。が、新聞印刷の光景は孝之進の脳裏に深く刻みつけられた。

そのころの孝之進は、一日働いてくたくたになった

夜、平吉の特別の配慮で与えられた灯火の下で本を開くのが、何よりも楽しみだった。

孝之進は暗誦をしても、算盤を前にしても、ほかの誰よりもずば抜けてよくできた。教師雨田喜助（あめだ きすけ）は、孝之進をかわいがった。孝之進が十五歳を迎えたころだ。雨田は、学校での一日が終わった時、孝之進をわざわざ呼んで座らせた。

「コウ、お前や、こいかあどげん道い進もち考へかんげ」ちよつか？（コウ、おまえはこれからどういう道に進もうと考えている？）

「働つながら学問へがっもん」ぬ続けつ行ごつ思ちよいもす（働きながら学問を続けていきたいと思つています）」

「お前いがおつ母さんのこつ心配しつせー、そげん考へかんげ」ちよつたわかい。働つながら学問ぬすつちゆうのは立派なこつじや。ただ薩摩いおつせな十分な学問な、出来へでけんじやろ。東京い出い気はなにか（お前がお母さんのことを心配してそう考えているのはわかる。働きながら学問をするというのは立派なことだ。ただ、薩摩にいては十分な学問はできんだらう。東京に出る気はないか）」

孝之進は、あつけにとられた。

「お前ゆ見えてきて、お前くさ、日本の国い貢献でく

い逸材じゃつち、確信すいごつなつた。お前ゆこい埋れさせつしもとは、俺にはあんまい惜し。銭へぜん」のこちや出来へでくい限い助くごちやい。東京で学んこつ考へかんげ」つみよ。そして、立派な日本ぬ作つくれ（お前を見てきておまえこそ、日本の国に貢献できる逸材であると、確信するようになった。お前をここに埋もれさせてしまうのは、おれにとつてあまりに惜しい。金銭的なことはできる限り助けたい。東京で学ぶことを考えてみる。そして、りつばな日本を作つてくれ）」

孝之進は唇が震えて、すぐには言葉を出すことができなかった。何とか、心を落ち着かせると、姿勢を正し、深々とお辞儀をした。

「先生、もつたいなか話へはな」す。有難へあいがと申へも」さげもす。わたしの中でもやもやしちよつた夢はこいじやつたとかち、今わかいもした。東京い出つ学問ぬ積ん、お国のためい全力を尽すこつ目指しもす（もつたいないお話、ありがとうございます。わたしの中でもやもやしていた夢はこれだったのかと、今わかりました。東京に出て学問を積み、お国のために全力を尽くすことを目指します）」

雨田は、うなずいた。

（以下次号）

白川静先生逝く

岡田 健嗣



去る十月三十日、漢字学の巨匠・白川静先生が、享年九十六歳で鬼籍に入られました。

私たちは漢点字の普及を祈念しつつ漢字の勉強をして参りました。正にヨチヨチ歩きの連続、ともに漢字という文字と組み合う力を得られず今も格闘しております。そのような中、先生の編まれた『字統』、『字訓』、『字通』の三部作は、太陽のように何時も先を照らし続けています。

現在本会は、漢点字の講習会を行っています。そして無謀な試みとは知りながら、講習会向けにオリジナルのテキストを作っています。否が応でも漢字の勉強をしなければ、事に当たれない状況に置かれていると言えます。そのようにしながら、川上先生の漢点字が、如何に漢字の構成を点字符号に反映しているかを日々知ることとなり、その素晴らしさを、改めて確信しています。

白川先生が私ども一般向けに書き下ろされたものは、先の三部作や漢字の研究書の他に、殷（商）から周への古代中国の民族と思想の変遷、孔子の解釈、ま

た「詩経」と我が国の「万葉集」の近接、殷（商）と我が国の創世神話の類似など、東アジアの文化の層を、〈漢字〉の解き明かしを通して、血の通った人間の営みとして、私たちに示して下さっています。

そのような中に私に最も印象的だったのが、「六書」の一つ「形声文字」の解釈でした。

従来は、意味符号と音符号から構成されているのが「形声文字」だとされていて、偏や旁をそれぞれに分類して説明しています。白川先生は、「音符号」とされているものも、意味の系譜に従っているのので、「形声文字」とはそのようにして成立した文字だとおっしゃっております。

經、徑、輕、莖、頸、脛
富、福、副、幅、匍
復、腹、複、覆、輻
場、腸、暢、湯、揚、陽、楊

これらの文字の旁は音符号としてその文字の読みを表しています。と同時に、意味の系列を成しています。これらの旁は、元来は独立した文字であって、意味も読みも備わっていたものと考えられます。現在では「形声文字」を構成する要素としてだけ用いられているために、音符号への位置づけが強く働いています

が、意味への注意を欠かしてはならない、先生はそのように言われていると、私は解しました。

私は漢点字から漢字の世界に入った者です。が、「白川漢字学」と言われる先生の立論は、私のような者にも大変刺激的で、先生の著書や編まれた辞書に接する度に、新鮮な驚きに似たものを感じ続けています。

もう一言お許しただけなら、私たちが使用している触読文字である（漢点字）は、充分先生の議論を、私たちに伝えてくれるだけの力を持ったものだというのを付け加えさせていただきます。

現在本会では、先生が監修された『常用字解』（平凡社）の漢点字訳を進めています。この後には、『人名字解』を予定しています。



岡田健嗣

岡田健嗣

この四月から、身体障害者自立支援法が施行され、十月から本格的に実施された。

この法律は、昨・二〇〇五年六月に衆院を通過したのだが、あの国会解散劇で一旦廃案になり、総選挙後に再び国会に上程されて、同十一月に成立したもので

ある。

私は昨年7月、障害者の移動支援を業とする会社を立ち上げて、事業を始めた。社会福祉の事業は、基本的に社会資源、とりわけ障害者を対象とする場合は税からの支出を頼りの経営となる。事業者としてはこの辺りが大変気になるところで、国や地方団体の財布の紐は、年々固くなっていることから、発足当初から経営難に陥る虞を抱きながらのスタートとなった。

事業者としての対応は勿論だが、私自身この制度の対象者でもある。この四月から暫定的に施行し、十月から本格的実施というタイムテーブルが昨年暮れに、行政から提示された。しかしおおよっぱな日程は分かったが、内容が分からない。対象者としても不安が増して行くばかりとなった。

事業者としては誠に新前で、新たな制度が始めるに当たって、何時・どのようにその枠組みと内容を明らかにされるか、どのように情報をキャッチすればよいかなど、ピリピリした毎日になって行った。

今現在はそのところから一年経っているのだが、實際上、不安を抱えているという事態は変わっていない。変わったのは、制度が既に始まっているということである。確かに始まっているのだから、何かはハッキリしたはずだ？ が、……？

たとえば、介護保険制度と障害者自立支援制度の合
体は、厚労省の中では決定事項となっていてと見てよ
いであろう。それを実現するには、自立支援制度ばか
りでなく介護保険制度にも、大きくメスを振るわなけ
ればならない。しかも省内には、そのタイムスケジュ
ールもできてはいるはずなのである。というのも、自立
支援制度の運用に当たって、介護保険と同様の基準を
適用して、利用者の原則一割負担、調査票による障害
認定、施設入居者の食事など生活経費の原則負担な
ど、障害者施策を介護保険制度による高齢者施策と同
型に整えようとしていることから分かることであ
る。

とりわけ調査票による障害認定というのが、介護保
険の介護度認定と全く同じ調査票を使用して行われた
ために、対象の障害者も調査に訪れた調査員も、障害
についてどのような項目が適用されるのか分からず、
誠にちんぷんかんぷんな問答があちこちで繰り広げら
れて、極めて不評だったことは記憶に新しい。置かれ
ている状況が一年前と変わらないというのは、むしろ
不安が増すばかりということでもある。

もう一つ、この自立支援法は四月から暫定的に施行
されたのだが、施設入居者はその四月から制度に直撃
されて、費用の負担が激増することから、施設で仕事

をしながらの生活では、費用が上回って、生活が成り
立たなくなるといふ例が続出した。ついに施設を退所
して、仕事もできなくなるといふ、この自立支援法の
理念と裏腹な結果が出現することにもなった。それが
マスコミに大きく取り上げられて、NHKテレビでも
大きく報道されたりした。

この秋の臨時国会で、厚労相は「障害者自立法は、
当事者の意見をよく聞いた上で練り上げられたもの
で、施行に当たっても、状況をよく検討する」と答弁
している。しかしどうもそうではなさそうだというの
が大方の見方であるが、一度決めたら変更には応じな
いという行政の態度は、今回も保持されているように
見える。

私が関わっている移動介助（ガイドヘルプ）の実態
に即して例を挙げれば、以下のような問答があった。
これは、障害者の通院の移動介助の際、これまではガ
イドヘルプ事業の中で行って来たが、今後は居宅介護
（ホームヘルプ）事業で行うというのである。そし
て、通院の介助は自宅から病院の玄関まで、病院の玄
関から自宅までに限るといふのである。通院の送り迎
えだけで、その途次での買い物や食事は不可だといふ
のである。また、病院内の介助は病院のスタッフが行
うもので、ヘルパーが手を出すことも不可だといふの

である。

厚労省がなぜこのようなことを言い出したのか分からないが、私は係官に電話で尋ねることにした。以下はその問答である。Q…が私、A…が厚労省係官。

Q…視覚障害者が通院するとき、ガイドヘルプの利便は、病院の入り口までしか認められないと聞きましたが、本当でしょうか？

A…ガイドヘルプ（居宅支援制度によるホームヘルパーが担当）の関与は、原則として、自宅から病院の入り口まで、帰りも出口から自宅までです。

Q…これまではよく病院からの帰り道に、買い物をしたり、食事をしたりしたのですが、それもできないのでしょうか？

A…原則としてできません。

Q…病院の中もガイドヘルパーのお世話にはなれないのでしょうか？

A…病院の中は、病院のスタッフが担当しますので、病院にお願いで下さい。

Q…私に通っている病院には、そのような係はいないようですが、院内での障害者のお世話をして下さる病院は、どの辺りにあるのでしょうか？

A…把握していません。

Q…調べていただけますか？

A…その予定はありません。

Q…全国の病院に、そのようなスタッフを置いていただくよう、ご指導をお願いできますか？

A…その予定もありません。

Q…そうしますと、私たち障害者はどうすればよろしいのでしょうか？

A…ですから「原則」として申し上げています。もしお通いの病院にそのようなスタッフがいない場合は、ヘルパーが同行してもかまいません。原則ですから例外も認めます。

Q…なるほどそうですか？しかし「原則」である以上、守られなければなりませんね。私の知る限りでは、障害者のお世話をするスタッフを置いている病院は、ほとんどありません。どんな場合にヘルパーの同行が認められるのでしょうか？

A…ですからそういう係がない病院でしたら、院内でもヘルパーの同行を認めます。

Q…しかし、認めないのが原則でしたら、私たちはどういう条件を整えばヘルパーの同行が認められるのか、大変心配になります。

A…いいえ、院内に係のいない病院でしたら、ヘルパーが同行して結構です。

Q…しかし、「原則」は…？

A…ですからそれが「原則」です。
Q…たとえ例外が一〇〇%でも、「原則」は原則なのですか？
A…そうです。

(二〇〇六年九月半ば)

この問答の後、私を担当するケースワーカーに報告したのだが、それによつてもあるまいが、横浜市やその他の自治体も、これに添った回答をするようになった。一つのグレーゾーンが解消したことになる。

このようにグレーゾーンを何とか解消したのだが、また次のグレーゾーンが出現し、そしてまた次、また次…、限りなく出て来るのである。



漢点字訳書紹介

『珠玉百歌仙』

(塚本邦雄著、毎日新聞社 一九七九年)

著者の塚本邦雄氏は、戦後歌壇の重鎮として長く活躍されましたが、昨年・二〇〇五年六月九日にご逝去されました。残された著書は、私たちに、和歌ばかりでなく、文学鑑賞の方法を、文化の批評の方法を指し

示して下さるものです。以下、同書の「序」から。

(岡 田)

『珠玉百歌仙』 序 砂中の金・雨夜の星

記紀歌謡から萬葉、二十一代集を経て近代短歌に到る和歌史展望、名歌抜粹の書は、既に幾度か、幾多の實作者、批評家によつて編まれ、世の人人に迎へられて来た。(中略)

かく思ひつつ、私自身も既に一度『王朝百首』と題して上限を九世紀の在原業平に、下限を十三世紀の順徳院に絞つて、すなはち敕撰集の上では古今から新敕撰の九代集にわたる期間の作家九十四人歌百首を選び、心の趣くままに鑑賞して一卷を成した。この百首の中には傳定家撰百人一首の歌人五十四人を選び、彼が敢へて逸した四十人を特に選び入れた。撰歌も前者五十四首は、十三世紀當時に於て、當然それこそ各歌人の代表作、一代の絶唱と思はれるもののみ提示した。言はばあまりにも有名で、しかも眞の秀歌に乏しい小倉百人一首を修正改撰するのが私の意圖であつた。従つて百首悉皆眷戀の歌のみ、小倉版に當然入つて然るべしと、十中八、九の頷くであらう齋宮女御、子、頼政、小侍従、宮内卿、俊成女等をも撰入し、私の存念はおほよそ果せたつもりである。それから約五

年の星霜を閲した。次に果すべきは『王朝百首』に先立つ時代の作、これに續く近世の詞華の發掘と顯彰であつた。(中略)

私はむしろ、從來歌の衰頹期、暗黒時代と見做し、鑑賞をためらひ續けて來た十三世紀後半から十九世紀に渡る夥しい歌群の中から、八代集和歌黄金時代の絶唱と比較し得る作を撰出することに努力を傾注した。衰微退潮と一口に言ひつつも、玉葉、風雅には逸すべからざる佳品が決して少くはない。二歌集を除く續後撰から新續古今までの十歌集から、砂漠の中に砂金でも拾ふやうな思ひで秀作を尋ね廻るのも、一種自虐的な樂しみだつたと言へる。砂漠にも金はあり雨夜にも星は見えた。連歌俳諧全盛の十四世紀から十六世紀を、俳諧師の和歌作品をも選び入れつつ近世へ下る道程は、おほよそそのやうな焦燥と諦觀がつきまとひ續けた。以後幕末までの行路は言ふも更なり、輩出する高名な國學者の眼高手低の凡作中から水準作を選び、その中から佳品を抽出する作業は相當な精神勞働である。和歌はほんの一握りの先覺者を岸に遺して、細りつつ、濁りつつ明治に流れ入る。そして「明星」と「根岸短歌會」によつて、實質的な革新の機運の盛上る直前で、この詞華集の時期は切上げた。兩派の切磋

琢磨を希つて觀潮樓歌會を開く先覺者、前人未踏の文學領域に挑戦した超人森鷗外の一首を以て閉ぢたのは、この後の歴史こそ初めて現代短歌に直結するものであり、卷を改めるべきであると考へたからである。

(中略)

『珠玉百歌仙』『王朝百首』(文化出版局)『秀吟百趣』(毎日新聞社)三者を通覽するなら六五〇年生れの齊明天皇から、一九三八年生れの佐佐木幸綱まで、ほぼ十三世紀にわたる日本の代表歌人の、記憶に價し愛誦に耐へる作品が掌握できるはずである。(中略)

私は少くとも『秀吟百趣』に準じて菟玖波集以後の連歌、あるいは芭蕉以後の發句の秀逸をすぐつて鑑賞し顯彰せねばならぬ。また當然記紀以後の歌謠群に深く分け入り、これも先年公にした、梁塵秘抄・閑吟集秀作撰『君が愛せし』(みすず書房)に準ずる私撰アンソロジーを編み上げて、その稱揚文を綴らう。日本の詩歌のすべてに、あまねく愛惜と畏敬の眼をそそぎ、鬱然たる一大詞華集を創り上げることこそ、言語藝術、殊に韻文定型詩に關する人すべてに通じる今生の「夢」ではなからうか。(後略)

大道たいどう廢すたれて仁義じんぎ有あり

大道たいどう廢すた有あり仁義じんぎ、知恵ちえ

出デ有リ大偽だいご。六親りくしん不シ和セ有リ

孝慈こうじ、国家こくか昏亂こんらん有リ忠臣ちゆうしん。

老子 第十八章（全文）

大器たいき晚成ばんせい

大方たいほう無ク隅くま、大器たいき晚成ばんせい。

大音たいおん希な声しやう、大象たいさう無シ形けい。

道たい隱レ無シ名な。夫そ唯た道みち善みち。

貸シ且ツ成ス。

老子 第四十一章（終わりの部分）

大道たいどう廢すたれて仁義じんぎ有あり、知恵ちえ出でて大偽だいご

有あり。六親りくしん和わせずして孝慈こうじ有あり、国家こくか

昏亂こんらんして忠臣ちゆうしん有あり。

大道たいどう|| 自然の道に従って生きること。老子が最高

善とするもの。「仁義」は、儒家の重んずる徳目。

六親りくしん|| 父子、兄弟、夫婦。親族全体をいうこともある。孝慈こうじ|| 親や祖先によくつかえる子や孫。

大方たいほうは隅くま無なく、大器たいきは晚成ばんせいす。大音たいおんは

声こえ希なく、大象たいさうは形かたち無なし。

道みちは隱かくれて名なづくる無なし。夫それ唯ただ道みち

のみ善よく貸かし且かつ成なす。

大方たいほう|| 大きな箱。大器たいき晚成ばんせい|| 大きな器はなかなか

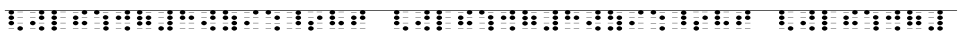
できあがらない。大象たいさう|| 無限に大きいものの形。

〈大意〉あまりにも大きなものは見ることも聞く

こともできない。それと同じように、「道」はかくれていて名づけることもできないものであるが、「道」こそが、万物に力を貸し与え、生成させるものである。

参照図書

高等学校教科書『古典一漢文編』（第一学習社）、同教科書準拠（教科書学習）（朋友出版）他



大 道 廢 レテ 有 リ 仁 義、 知 恵
 出 デテ 有 リ 大 偽。 六、 りく 親 不
 シテ 和 セ 有 リ 孝 慈、 国 家 昏
 こん 亂 シテ 有 リ 忠 臣。
 大 方 ハ 無 ク 隅、 くま、 大 器 ハ 晩
 成 ス。 大 音 ハ 希、 な ク 声、 大 象
 ハ 無 シ 形。
 道 ハ 隠 レテ 無 シ 名 ヅクル。 夫
 レ 唯 ダ 道 ノミ 善 ク 貸 シ 且 ツ 成
 ス。

前号の訂正と補足 — 「行々志学」 (ゆくゆくしがく)

- (p19) 漢文中にある「ㄥ」は「々」(祥南行書体)にフォントを訂正します。 行ㄥ → 行々
- (p20) 点文字符号に対応する入力文字は、「ㄥ」でなく「々」に訂正します。 行ㄥ → 行々

- * 「々」は漢文訓読の際に小さく添えられる繰り返し記号です。
- * 「々」は「ㄥ」の祥南行書体です。同フォントを持たないパソコンソフトで再操作したため、「ㄥ」になりました。
- * 漢点字用のテキスト入力の場合、「行々」は「行々」のように「々」で入力します。対応する点文字符号は「ㄥ」です。

ご報告とご案内

一 東京で、漢点字の勉強会を開催致します。

東京漢点字羽化の会では、来年四月から、漢点字の勉強会を開催致します。「うずれば」一七号に、ご案内を掲載致しましたので、ご覧下さい。

二 新年会のご案内

本会では例年通り、新年会を予定しています。会員並びにご支援下さる皆様には、是非ご参集賜りますようお願い申し上げます。

日 時：二〇〇七年一月二十一日(日)

一三・三〇～一五・三〇

場 所：ワシントンホテル桜木町 五F

レストラン・ベイサイド

(JR・横浜市営地下鉄、桜木町駅前)

費用：五、〇〇〇円。

お申し込み…一月十日(必着)

メールかFAX(045-803-9464(木下))で。



前回の新年会の様子

三 漢点字訳書のご紹介

本会ではこれまで、漢点字で読まなければ理解・鑑賞できない教養書を漢点字訳して参りました。今回も二冊の本をご紹介致します。

塚本邦雄著『珠玉百歌仙』

(毎日新聞社、一九七九年) ……本文参照

高橋睦郎著『百人一句』

(中公新書 一四五五、一九九九年)

以上二冊は、ご希望に応じて、漢点字書、EIB
ファイル版何れでもお申し込みいただけます。

四 横浜市健康福祉総合

センターの改良工事

明るく二月から、本会が活動拠点としている、市
社会福祉協議会・ボランティアセンターのある、
横浜市健康福祉総合センターの建物が、耐震・アス
ベスト除去工事に入ります。それに伴って暫くの
間、建物への立ち入りが制限される見通しになりま
した。

その間、本会の活動をどのようにするか、現在検
討しております。

とりわけ漢点字講習会をコンスタントに開催する
には、これまで以上に日程や会場の確保に、困難を
覚悟しなければなりません。

会員並びにご支援下さる皆様の、変わりませぬお
力添えを賜りますよう、願って止みません。

編集後記

もう今年も残り少なくなっていました。
ました。

来月は恒例の新年会です。このと
ころ会場は桜木町駅前のワシントンホ
テルに落ち着いたようです。原稿の量
の関係でちよっと隙間ができてしまっ
たので、この間の新年会の写真を1枚
引っ張り出して入れてみました。沢山
の方にご参加いただいて、楽しい会に
なればと祈っています。

上の記事にもありますように、われ
われの活動拠点である健康福祉センタ
ーのビル全体が、アスベスト除去と耐
震工事のために一年以上も使用が制限
されるといことです。点字プリンタ
ーの置き場や、定例会・

講習会の場所について、
だいぶ不便なことになり
そうで心配です。



E-MAIL (岡田健嗣) : eib_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。